

あ と が き

毎号ページ数が多く、編集委員として嬉しい限りです。前号はあたかも「会議特集」号でした。会議の報告を書くということは、結構難しいものです。テーマだけを羅列しても面白くないし、面白い話だけを書くと、何かもっと大切なことを書き漏らしたのではないかと、心配になります。本ニュースは出張報告集ではありません。筆者の「観点」を期待しています。

先日小さな会合に出るためワシントン近郊の国立標準・技術研究所（NIST）に行ってきました。ここはかつて国立標準局（NBS）と呼ばれ、昨年創立 100 年をむかえました。標準開発のための精密測定や規格の登録・維持に関する仕事をしていますが、研究炉もあり、冷中性子や偏極中性子を使った研究も行われています。夕方になると、鹿の群れが敷地内の広々とした草地に現れ、グースのつがい散歩したりしています。放射線物理研究棟の渡り廊下のガラス壁に、カールスルーエの Nuclear Chart のデザインが使われているのを見つけました。（下に写真）

規格といえば、なんと言っても「ネジ」ですが、最近読んだ本（橋本毅彦著「標準の哲学」、講談社）にこんな話が載っていました。1904 年ボルチモアで大火災が発生した際、他所から持ってきた消火ホースのネジが消火栓と合わなかったため放水できず、延々 30 時間も燃えつづけ 70 区画が焼失した事件が起こりました。早速事態改善のため NBS が消火栓とホースのネジの統一規格作成を命じられたのですが、その NBS で、上記の大火災から数ヶ月後のある日、敷地内の建物でボヤ騒ぎがあり、その時も別の建物



から持ってきた消火ホースと消火栓のネジが合わず、職員を慌てさせたというのです。後日 NBS が調査したところ、寸法や形状の違う消火栓が全米で 600 種以上もあったそうですから、よくある話だったのでしょうか。消火栓と消火用ホースの規格化の必要性はこうして認められたのですが、規格品の普及は「いまいち」だったようです。

（喜多尾憲助

kitaoken@aol.com）

核データニュース編集委員会

中川 庸雄(委員長、原研)、井頭 政之(東工大)、岩本 修(原研)、喜多尾 憲助(データ工学)、長谷川 明(原研)、吉田 正(武蔵工大)